
天と地の境界線の番外編 + 裏事情

虹乃 咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天と地の境界線の番外編＋裏事情

【Nコード】

N5647Q

【作者名】

虹乃 咲

【あらすじ】

天と地の境界線の番外編やネタバレ情報満載です。というより作者の暇つぶし太郎ですね。

注：本編より先にみるとグアーっとなります。

とある日常（前書き）

多分、二人が中学生の時のお話・
二人は公立高校です

とある日常

「ほいよ、太陽」

「ん？さんきゅ」

「見たら感想聞かせろよ」

太陽は何故か友達から英和辞書を渡された。

話しかけられた時は他の友達との談笑に華が咲いていたため家に帰ってから見ようとその時は余り考えていなかった。

+ + +

明日の支度をしようとカバンをひっくり返して中の物を全部出した。

ひっくり返した教科書類とともに英和辞書が転がり出た。

「あ、そういえば辞書渡されたんだっけ」

何があるか全く分からなかったが中を確認しようと１ページ目を

開くとページ下に絵が描いてあった。

男が書くような余り凝っていない絵だ。多分、野球少年を描いたのだろう。

なんだパラパラ漫画か、次も開こうとした。

「太陽、ご飯だよ」

だが下から聞こえた親の声に辞書のことなど直ぐに忘れ、下に下りていった。

食べ終わり、テレビを見ながらのんびりしていると上から蛍子の声がする。

「兄さん、辞書貸して」

妹は勉強熱心で予習復習を毎日している。

「ああ、適当に取ってって」

本当に出来た妹だ。

そして再びテレビに集中しようとした。

「太陽、あんたも蛍子を見習いなさい」

「え」

「全く、蛍子の爪の垢でも煎じて飲みなさい」

母がテレビのチャンネルを変えた。

この時間は母が好きな韓国ドラマがやる時間だ。
へいへい、わざとらしく階段の音を大きくたてながら上がり自分の部屋に入りベッドに転がり漫画を読み出す。

心地よい眠りにつきそうな時に携帯が鳴った。

着信音は『生きてるって素晴らしい』、なんだ中嶋か。

「はいはい、なんすか」

眠さもあつて気だるく答えた。

「感想は？」

何故か興奮した様子で中嶋が出た。

「は？何の？」

「まだ見てねえの？今日貸してやった辞書の中に合成写真入れたんだけど。すっげー上出来」

「写真？」

「まあ、いいや。明日感想待ってるぜ」

そう言つて一方的に切った。

「何だったんだ。あ、辞書か。明日返さないと」

眠たい眼をこすりながら机にふらふらと向かう。

「あれ？無い」

さっきひっくり返した時にはあったはずだ。

そういえば蛍子が辞書借りに来たな、その時に持ってたのか。

蛍子の部屋のドアを叩く。蛍子の部屋は太陽の真横だ。

「おい、蛍子。お前、俺の部屋から英和辞書持ってたか？」

だがいくら叩いても返事はない。

「蛍子？開けるぞ」

物音はしないが蛍子はいるはずだ。

ドアを開けると机に向かって勉強している蛍子がいる。

「なんだ、いるじゃんか。返事してくれよ」

そのまま蛍子に近づく。

「てか辞書知らね？」

だが蛍子の返事はない。

「おい」

蛍子の肩に手を置いて振り向かせると蛍子が冷ややかな眼をして

いる。

その眼だけで殺人事件が起こせるほどの眼力だ。

「な、何だよ」

その眼におののきながら蛍子の手元に眼をやると何か何枚かの写真のような物が見える。

よく見るとそれは女性が全裸、もしくは半裸に近い状態で卑猥なポーズをとっている。しかもそれらは太陽のクラスの女子だ。

写真で彼女たちは太陽たちが通う中学校の体操服ではなく、今時にはないブルマを履いていたり、何故かナース服やチャイナ服を着ている写真ばかりだった。

「な、な、何だそれ」

「さいつてえ」

蛍子は写真を辞書に戻して辞書を太陽に叩きつけた。

「今後半径3メートル以内には入らないで下さい、変態さん」

そのまま部屋を出て行った。

「え?」

蛍子の部屋には片手に辞書をもって呆然とした太陽だけが残った。

その後いくら説明しても聞いてくれない蛍子に張本人の中嶋を合わせて何とか誤解を解いた。

だがその中嶋が今度は蛍子が気になり、それを太陽に言ったところ太陽にぼこぼこに殴られたのは別の話したとか。

とある日常（後書き）

このど変態め！！

違います、太陽は正常男子です

悪いのは全て悪友の中嶋君です・
・

黒の騎士団7番隊（前書き）

作者が覚えときたいモノです

黒の騎士団7番隊

黒の騎士団・・・貴族の魔法には劣るが体術が貴族の有翼人より3倍、『地』の人々の5倍に優れる

黒騎士7番隊：総隊長

副隊長 ロッツィ

第1番隊（規律が厳しい）

隊長：

副隊長：

第2番隊（絶対の忠義、質実剛健）

隊長：

副隊長：

第3席：フツチェ

第3番隊（隠密機動隊、処刑、暗殺）

隊長：

副隊長：ブライト

第4番隊（荒くれ者、ゴロツキの集まり、戦いが大好き）

隊長：

副隊長：

第5番隊（新技術など開発）

隊長：

副隊長：

第6番隊（天才児が率いる、皆真面目、指導が末端まで届く）

隊長：

副隊長：

第7番隊（治療、補給を主任務、後方に位置、負傷した隊士の救助）

隊長：

副隊長：

黒の騎士団7番隊（後書き）

これからも増えます・・・

Of courseでっせ！

バレンタインデー（１）

今日のために店は準備をし、恋人たちは色めきだし、学校中が騒ぎだす。友達同士で内緒話をしながら笑ったり照れたりする。

今日はバレンタインデー、甘い香りが街のあちこちから広がる。

もちろん、椎名家もバレンタインデーはある。それなのに螢子はソファ―に身を沈め朝から動こうとしない。

残念なことにバレンタインデーの今日、休みの日であるため義理チョコを期待していた男子は涙を飲むこととなっただろう。

だがゆったりと足を投げ出している螢子の後ろに虫が一匹張り付いた。

「ケイ、今日は何の日か分かるか？」

「・・・」

蛍子は黙って、雑誌をぺらぺらとめくる。読んでいるこのファッション雑誌をもとにして蛍子は自分の服のコーディネートをしているのだ。

「なー、なー」

「・・・」

「蛍子ちゃん」

蛍子は盛大な溜息をつくと雑誌を虫に投げつけた。だが虫の反射神経は無駄に良く、雑誌を手で掴んでかわした。

「兄さん、うざい」

「そんな、兄をうざいなんて」

よよよと泣き崩れる兄、太陽を無視してテレビをつけるがどのテレビ番組も朝からチヨコレートの作り方の料理番組ばかりだ。

だが太陽はこれみよがしに立ち上がり、喜々とした表情で蛍子を見つめる。

「ちょーだい」

「お母さんが今日の帰りに買ってくるって」

「俺はケイの手作りがいい」

「面倒」

終わりの無い応酬を繰り返すが両者、折れる気配が無い。
そのため太陽が嫌いな話に蛭子は持つて行く。

「じゃあ、バレンタインデーって何でできたか知ってる？」

「知らん」

堂々と自分の無知をさらけ出す兄に白い眼を向けてしまうのは仕方がないことだ。

蛭子はゆっくりと話し出した。

バレンタインデーの歴史は、ローマ帝国の時代にさかのぼるとされる。

当時、ローマでは、2月14日は女神ユノの祝日だった。ユノはすべての神の女王であり、家庭と結婚の神でもある。翌2月15日は、豊年を祈願するルペルカリア祭の始まる日であった。

当時若い男たちと娘たちは生活が別だった。

祭りの前日、娘たちは紙に名前を書いた札を桶の中に入れることになっていた。翌日、男たちは桶から札を1枚ひいた。ひいた男と札の名の娘は、祭りの間パートナーとして一緒にいることと定められていた。そして多くのパートナーたちはそのまま恋に落ち、そして結婚した。

ローマ帝国皇帝クラウディウス2世は、愛する人を故郷に残した兵士がいると士気が下がるという理由で、ローマでの兵士の婚姻を禁止したといわれている。キリスト教司祭だったウァレンティヌス（バレンタイン）は秘密に兵士を結婚させたが、捕らえられ、処刑されたとされる。

処刑の日は、ユノの祭日であり、ルペルカリア祭の前日である2月14日があえて選ばれた。ウァレンティヌスはルペルカリア祭に捧げる生贄とされたという。このためキリスト教徒にとっても、この日は祭日となり、恋人たちの日となった。

「いや、だがここは日本だ」

「はいそうです、太陽君。よく気がつきましたね」

まるで奇跡が起こったような口ぶりだが太陽は全く気付いてない。というか褒められて嬉しそうに破顔している。

「日本社会に定着したのは、1970年代後半。女性が男性に親愛の情を込めてチョコレートを贈与するという『日本型バレンタインデー』の様式が成立したのもこの頃」

「はい、先生」

「手はぴしつと上げなさい」

「『日本型バレンタインデー』ってなんですか？」

「ヨーロッパなどでは、男性も女性も、花やケーキ、カードなど様々な贈り物を、恋人や親しい人に贈ることがあります。しかし『日本型バレンタインデー』とは第一に贈答品にチョコレートが重視される点、第二に女性から男性へ一方通行的贈答である点、第三に女性の愛情表明の機会だと認識されている点です。このほか、職場における贈答習慣が強い点や、キリスト教との直接的関連はほとんど意識されていない点が『日本型バレンタインデー』の特徴となります」

太陽が感心したように首を縦に振る。

さながら新しい知識を吸収した子供のようだ。しかし数分もすれば「バレンタイン」って誰のこと？と忘れてしまうだろう。

「ケイは誰にチョコをあげるんですか？」

不意に目が鋭くなるが説明をするのに飽きてしまった蛍子は後ろをむいてしまっていたため見ていない。

「生徒には関係ありません」

「男ですか？」

「好きな男性にチョコをあげるのは日本だけです。まあ最近は韓国

などもですが」

「男ですか？」

「くどいです」

あまりのしつこさに蛍子はうんざりして2階へと上がって行ってしまった。

自分はもらえないのに、ぐぬぬと蛍子の雑誌を丸めて地団駄を踏んでいる太陽は雑誌をくしゃくしゃにしてしまい蛍子に怒られることとなった。

バレンタインデー（1）（後書き）

お久しぶりです

2月なんてとっくに過ぎてますが、まあいつか

バレンタインデー（2）

2人の母が買い物から帰ってきた。

太陽はこの日だけはわざわざ玄関から荷物を持って台所まで持って冷蔵庫の中を買ってきたものを入れる。

親からもらえるチョコももてない男には貴重なのだ。むしろ親がいるからこそ、男達は救われるのだ。

「あんたも現金な奴よね」

息子の思惑など分かっている母は別の袋から綺麗にラッピングされた箱を2つよこした。

「そっちの茶色い箱が太陽ので、もう一つのピンク色の箱は蛍子のだからね」

「・・・は？」

「だからピンク色の箱のチョコは蛍子の物だって」

あんた耳、悪くなったと見られる。やめてよね、病院代がもったいないというお小言つきで。

いや、ちょっと待ってくれ。

この茶色いのが俺のだと？こっちのピンク色の箱の方が大きいのは気のせいかな、いや気のせいではない。

太陽が珍しく反語を使っていると上から蛍子が下りてきた。

「あ、お母さん帰ってきたの。そのピンク色の箱は私のでしょう、じゃあ、ありがとう」

太陽の手から箱を奪い取ると2階へと戻っていった。

「・・・嘘だろう?」

2人の愛はこの手のひらサイズでいいのか。
愛は量ではない、質だ。そんなことは百も承知だ、しかし今日くらい量を見せてくれてもいいじゃないか。

とぼとぼと小さなチョコの箱を手には階段を上がって蛍子の部屋の扉を見つめるが出てくる様子は無い。

悲しくなって目頭を押さえながら自分の部屋の扉を開けた。そして机に向かって珍しくこの虚しさを紛らわせようと勉強しようとした。

だが汚い机の上に見慣れない箱が置いてある。

これまた手のひらサイズだが蓋をとってみると中から茶色い物が見える。

「おおう、トリュフだ!!」

手作り感溢れるチョコは4つあった。

口に入れるとほんのりと上品な甘さが広がる。

「う、うまい!!」

自室を出て蛍子の部屋をノックなしに開けると蛍子が箱にラッピングをしている最中だった。

あまりの扉の開き方に驚いていたが、太陽が手に持つ箱を見て納得する。

「部屋はノックしてって言ってるでしょう」

「うまいよ、ケイ。チョコさんきゅな」

「はいはい」

手で振り払うと太陽は気分のりのりで自分の部屋に戻って行った。今日は最高の日だな、チョコの甘さの余韻に浸りながら椅子で時間を持て余した。

だが次の朝、蛍子が可愛い袋をぶら下げて学校に行こうとする姿を見て、食べ途中だった味噌汁を吹きだした。その汁が父親にかかり、父親のこめかみに青筋が浮かぶ。

「ちょ、ケイ！その袋なんだ？」

「何ってチョコに決まってるでしょう」

「バレンタインは昨日だぞ」

「そんなこと分かってるわよ。昨日は休みだったから今日あげるのがお約束じゃない」

ラッピングもなかった自分のチョコとは違って箱も大きいし、手がこんでいる。

昨日あんなに感動したのに、その気持ちを返してほしい。

「ってか、一つだけ大きいのが入ってるんですけど」

袋から飛び出している箱に目がいく。他の箱よりも少し大きいしラッピングも他の物と違う。

「当たり前でしょう、これは男の人にあげるんだもの」

しれつと言い返す蛍子に太陽は口の物をまた吐きだす。今度はご飯粒が父親にかかり、青筋はくつきりしだして頬の筋肉が動いている。

「ちょ、待て。認めんぞ、そんな男は！！」

まるで父親のような態度で家を出て行こうとする蛍子を止めようとした。

だが肩と掴まれた。

「太陽、今から会社に行くっていうのにやってくれるじゃないか」

無理矢理笑顔を作った父親が太陽の行く手を阻む。そのスーツには太陽の吐きだした残骸がかかっている。

「親父、行かせてくれ！ケイが、ケイが・・・」

「その前に父という壁を飛び超えていくんだな」

その日、太陽は学校に遅刻しそうになるくらい父親の説教を朝から聞き、帰っても蛭子にチョコを渡した相手を教えてもらえずに最悪のバレンタインデーが終わった。

バレンタインデー（2）（後書き）

誰に渡したんだろうね・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5647q/>

天と地の境界線の番外編 + 裏事情

2011年4月20日00時56分発行